

論文

日本語時制形式の意味

—事態解釈の観点から—

山 本 雅 子

要 旨

本研究は、時制形式の意味を言語主体の事態解釈の観点から統一的に説明することを目指す研究の一環として、日本語の動詞の時制形式のコアなる意味を説明する。従来の研究では、時制形式の意味はアスペクトとの関連で説明されるのが通説である。しかしながら、日本語の時制形式の意味は実に多様な様相を呈しており、時制・アスペクトの組み合わせだけでは、とてもその多様性の実際は説明され得ない。そこで、本研究では、この多様性を多義性の構造の呈する様相と捉え、多義性を統括する言語主体の事態解釈の観点から時制形式の意味を考察する。結果、次の二点を主張する。まず、従来唱えられている時制の意味は、現実、事態の實在、事態との心的遠近距離といった、主体の事態認識にかかわる要因に誘発されて後出する意味であること。また、従来では言及されることのなかった意味ながら、時制形式は事態を主観的に解釈するか客観的に解釈するかという、主体が事態を把握する際の主客観の解釈態度差異を反映すること。こういったコアを成す意味が据え置かれる環境の如何によって、さまざまな様相を呈しているのである。

キーワード：時制、事態解釈、現実、實在、心的距離、主客観解釈

1 はじめに：問題の在処

本論文では、時制形式の意味を言語主体の事態解釈の観点から統一的に説明することを目指す研究の一環として、日本語の動詞の時制形式のコアなる意味を説明する。

ある事態が、ある時の一点（基本的には発話時点）を基準として、その時のことであるか、それより前か、それより後かによって文法形式が一定の規則性をもって変化するとき、その文法形式を時制形式という。日本語は、〈本を読む〉という事態を時間表現と共起させて表現しようとする、「昨日、読んだ」「今、読んでいる」「明日、読む」というように、過去を表すにはタ形、現在を表すにはテイル形、未来を表すにはル形を使用しなければならない。この組み合わせを違えて、「明日、本を読んだ。」とか、「昨日、本を読む。」とはいえない。このことは、中国語に見られるように、「昨天（昨日）」「明天（明日）」というような時の表現があれば、どの時制を表すにしても動詞の形を変化させることのない言語との顕著な違いを示すものであり、この点を見るかぎりでは、日本語には時制形式があるといえそうである。

言葉を自律した記号として捉える従来の研究パラダイムでは日本語の動詞の時制・アスペクト形式は表-1のように説明されている。

| | 過 去 | | 現 在 | | 未 来 | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 述語 | 状 態 | 非状態 | 状 態 | 非状態 | 状 態 | 非状態 |
| 完結相 | — | タ | — | — | — | ル |
| 非完結相 | タ | テイタ | ル | テイル | (ル) | (テイル) |

表-1

(町田 1989: 152)

日本語の動詞の時制形式にはタ形式とル形式があり、さらに、タ形式は「語幹＋タ」「語幹＋テイタ」、ル形式は「語幹＋ル」「語幹＋テイル」という、それぞれ二つの形式を持つ。これらの四形式が、述語の別とアスペクトの別に応じて時制の別を表す。述語には〈状態動詞〉と〈非状態動詞〉があり、アスペクトには〈完結相〉と〈非完結相〉がある。テンスはこれら〈状態〉〈非状態〉〈完結〉〈非完結〉の要素の組み合わせで説明されるものであり、〈現在〉〈過去〉〈未来〉は言語形式タ、テイタ、ル、テイルによって表される。

このような従来の研究成果からは、日本語の時制は、〈現在〉は「状態／ル」「非状態／テイル」、〈過去〉は「状態／タ」「非状態／タ、テイタ」、〈未来〉は「非状態／ル」で表されるといえそうである。しかしながら、実際の振る舞いを観察すると、このような時制と時制形式との関係は必ずしも双方向に作用するものではないことが分かる。例えば、過去

を表すとされるタ形式を例に挙げれば、「今度お会いしたときにこの本をお返しします。」というタは「今度」と共起していることから未来を表すとみなすべきだろう。また、「あつ！こんなところにあった。」のタは話者の目の前の存在を表現していることから、時間的にいえば現在を表しているといえる。つまり、大概において過去はタ形式によって表されるといえるが、だからといってタ形式が必ず過去を表すというわけではなく、未来を表す場合も、ときには現在を表す場合もあるのである。

そして、さらには、時制だけでなく実に様々な意味機能があることが尾上（2001）では示されている。

- [完了] ・病気はもう治った。
[過去] ・先週の日曜日は六甲山に登った。
[確言] 1「事態の獲得」 ・わかった！なるほどそうだったのか。
2「見通しの獲得」 ・（殺人計画の完成）これで間違いなくあいつは死んだ！
3「発見」 ・バスが来た！
4「決定」 ・よし、買った！
[想起] ・君は、たしか、たばこを吸ったね。
[要求] ・どいた！どいた！
[単なる状態] ・とがった鉛筆は折れやすい。

（尾上 2001: 373（一部抜粋））

確かにタ形式には過去を表示する機能がある。これは否定できない事実である。しかし、日常のタ形式の振る舞いを観察すればすぐに分かることだが、特殊とみなされている上記の様々な用法も、実際の言語生活ではわれわれは実に頻度高く使用しているのである。しかも、それらの用法をもたらすタのはたらきは上にあるような安易な用法分類ではとうてい納得のいくようなものではない。例えば、[確言]として挙げられている例文「バスが来た！」は文末に「！」があることから「発見」と名付けられているのだろうが、これを、「交通渋滞で遅れたのだろう、3時になってようやくバスが来た。1時間も遅れたというわけだ。……」といった文脈では、同じ「バスが来た」というタ形は「過去」を表していることになる。また、「君は、たしか、たばこを吸ったね。」は[想起]と名づけられているが、[想起]であると判別できるのは「たしか」という副詞の作用である。「たしか」のかわりに「さっき」という副詞と共起させ、「君は、さっき、たばこを吸ったね。」とすれば、このタ形も[過去]ということになるだろう。これらの例からは、用法と用法的の違いを示しているのがタ形でないことが明らかであり、したがって、従来、用法として分類されている分類名は動詞の語幹が備えている語彙的意味であつたり、文中の副詞のはたらきであつたりするといっても言い過ぎではないだろう。

このように考えると、上記の〔完了〕〔過去〕〔確言〕〔想起〕〔要求〕〔単なる状態〕というすべての分類を統括するような、さらには、先に挙げたように「過去」のみならず、「現在」「未来」をも表すタ形もあることから、すべての時制の表出を可能にするようなタ形の意味機能とは果たして一体何なのか^(注2)、という疑問に到達せざるを得ない。本来文法形式の意味機能を説明するということは、例外とされる機能をも含めた統一的説明がなされてはじめていえることである^(注3)。タ形式についていえば、その意味機能は、日常の言語生活において出現頻度の高い過去表示機能と上記に見られる種々の特殊な意味機能とを統合する、より一般的な説明力をもつものでなければならない。

過去を表す形式といわれながら、過去のみならず現在、未来を意味することもあれば、さらには時制以外のさまざまな意味機能も表すという、タ形式のみせる名称と意味機能の不一致は、現在形式とされるテイル形にも、また、未来形式とされるル形にも全く同様の現象^(注1)として存在している。つまり、日本語では、時制形式の意味機能は、たしかに時制の意味をも表しはするものの、実に多様な様相を呈しているのである。こういった現象に対し、従来の研究では、時制機能のみが時制形式の本質的な意味機能であることをゆるがせない真であることを前提とし、時制機能では説明され得ない種々の意味機能は特殊な用法として列挙に留めている傾向が強い。ここには、これまでの言語研究がトップダウン的な規則依存の文法観に則って行われてきたことを示す顕著な姿勢が露わである。

「時」を表すとされる文法形式が「時」を表示する場合もあれば、「時」以外の多様な意味機能も呈するというこの現象は、一つの言語形式が文脈によってさまざまな意味機能を呈するという点において、多義性の構造^(注4)をめぐる問題と同一である。多義性の解明には、いわゆるせまい意味での文法的な知識にかかわる能力だけでなく、言葉の創造性や拡張にかかわる能力を、人間の認知能力から包括的に捉え直していくアプローチが必要とされる。本研究では、これまで、文法形式という自律した抽象的な記号とみなされていた時制形式を、外部世界との相互作用に基づく言語主体の身体化の観点から統一的に説明する。手続きは以下のようなものである。

まず2章では、事態解釈の観点から英語の時制の意味を説明する Langacker の理論 (1991, 2008) を紹介する。そして、この理論を援用し、日本語の時制形式の意味を事態解釈の観点から考える。続く3章では、日本語時制形式の意味が事態解釈における言語主体の主観・客観的態度をも反映することを説明する。最後に4章で、日本語の時制形式の認知的意味を提示する。

2 事態認識と時間観念

時制を示すこともあれば、時制では説明され得ないなんらかの機能を持つ日本語の時制形式の意味機能の統一的説明を目指して、この章では、事態解釈の観点から時制形式の意味を説明する Langacker (1991, 2008) の理論を紹介し、これらの理論に基づいた日本語の時制形式の意味を考える。

人が事態を解釈する態度は多くの要因によってかたちづけられており、その要因はあらゆる人類に働くものもあれば、ある特定の文化に限られるものもある。したがって、時制形式の意味を主体の事態解釈態度の反映とみなせば、その意味にはさまざまな要因が関与していると想定されるのであり、言語によって時制形式の反映する意味に異なりが生じるのは当然である。日本語と英語の時制形式の振る舞いにもさまざまな違いがあることは周知の事実であり、例えば、英語では時制は動詞カテゴリーに特有の概念であるが、日本語では形容詞にも時制がある^(注5)とされていることなどは、日英語の時制概念の差異の大きさをものごたる一つである。

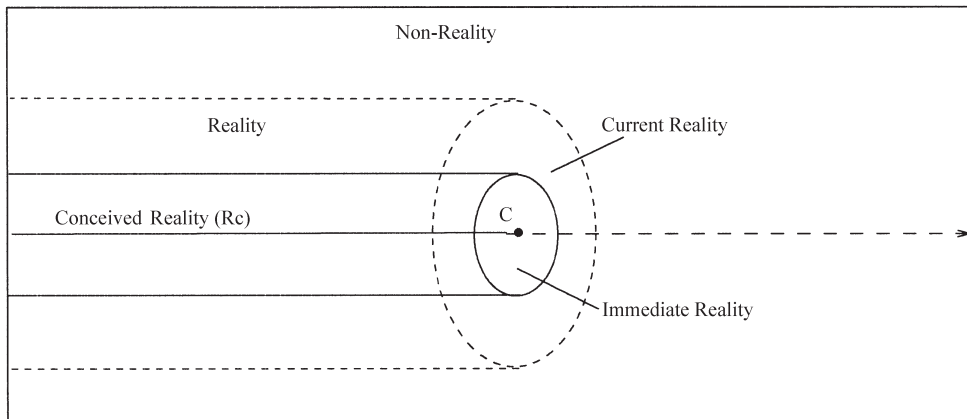
このように考えれば、Langacker (既出) の説明する英語の時制形式の意味についての理論がそのまま日本語の時制形式の意味体系を説明するものでないことは推測に難くない。しかし、Langacker (既出) の理論は、「現在時制」形式が種々の意味を表すこと、「過去時制」形式が必ずしも過去を表さないことなどの英語の時制形式が抱える、名称と実際の振る舞いの齟齬を説明すべく打ち立てられた理論であり、まさに本論が求める日本語の時制形式の意味探求と同一の問題意識に端を発している。同一の問題意識に依拠した研究であれば、対象言語の異なりを超えて、その研究成果が日本語の時制形式の統一的意味の説明に大いに貢献すると考える。

2.1 英語の時制・モダリティ体系 [Langacker (2008, 1991) 要約]

時制とモダリティの連関の源は、われわれが世界を経験するのは一瞬、一瞬の連続としてであることから、現在の瞬間のみを直接アクセス可能とすることにある。過去はもはや直接経験することはできず、回想を通してのみ経験される。そして、未来は間接的にさえも経験されることはあり得ない。われわれは企図するか、推測するか、想像することだけしかできないのである。こういった本源的なやり方のなかで、出来事を確認する程度は現在に関連づけられた時間的位置と共存する。

出来事の変遷が現実 (reality) を輪郭づけていくのであり、現実は時間のなかを進展したり、時間のなかで姿を見せたりする。時間の流れは一方向であり、逆行はない。比喩的にいえば、現実とは「伸展する」円筒として描くことができ、絶えず新しい出来事のなかを拓

がり進んでいる。図1で表す。円筒の先端は目下の現実 (current reality) とでもいうものであり、伸展がまだ進んでいる場所である。ここでは事柄はまだ絶え間無く変化しているが、しかし一方、過去は固定されており、未来は今後どんなかたちをとるか分らない。



(図1)

Langacker (2008: 301)

世界について、また、世界がどのように進展するかについて、われわれが知っていることは、われわれはすべてのことを知ることはできないということである。このため、われわれが知っていることは部分的なものであり、確実に正確だとは言えないことを了解しつつ、われわれは自身が持っている現実という**個人的概念** (conception) を発展させ、**見做し現実** (conceived reality (Rc)) を構成する。これはある概念主体Cが現実として受け入れているものである。生粋の現実同様、見做し現実も伸展する円筒として描かれ得るものであり、目下の経験のなかを絶えず増大している。先端面は**直接現実** (immediate reality) と呼ばれ、概念主体が現実として受け入れる目下の現実の一部である。直接現実 is 基本的にはわれわれが生きて認識しているところであり、われわれが瞬間から瞬間へと直接経験をやる場である。

時間と認識判断はこのように基本的なレベルで連関しており、このことが時制形式とモダリティ形式という言語学的なかたちに自然に引き継がれている。時制は一般的に、発話時に関連づけられた出来事の時間的位置を指し、一方、モーダルは出来事が生じる可能性に関与しているといわれている。しかし、両者の区別ははっきりしておらず、英語にはその例の枚挙に暇がない。

ある表現を発する話者やその聞き手、さらにその表現が発せられる時間や場所も含め、発話という事象に関わる要素を統一的に指す概念をグラウンドといい、主体がグラウンド

日本語時制形式の意味

と関連づけて事態を解釈することをグラウンディングという。英語のグラウンディングシステムは、コアのところで二つの極からなっている。形式的には、一つはゼロ形式であり、もう一方は表立った形式である。このシステムはアイコニックであり、ゼロ形式はある種の認識的直接性、すなわち、概念主体に近いことを表す。一方、表立った形式はより大きな認識的距離を指示する。プロファイルされたプロセスが概念主体にとって認識的に**直接**(immediate)か**非直接**(non-immediate)かを示すのである。

モーダルな場合は、ゼロ形式はmay, can, will, shall, mustが無いという意味である。モーダルが無いということは、概念主体がプロファイルされたプロセスを**現実のもの**(real)、つまり、見做し現実の一部として受け入れているということの意味する。モーダルはプロファイルされたプロセスを見做し現実の外側、つまり、**非知現実**(irreality)に置く。モーダルによってグラウンドに位置づけられたプロセス、すなわち、概念主体によって現実として受け入れられないプロセスは**非現実のもの**(unreal)といえる。

モーダルがない場合、グラウンドに位置づけられたプロセスは概念主体の現実概念に属する。そして、見做し現実のなかでプロファイルされた出来事が見つけられた場所を「テンス」が特定する。この場合、二つの基本的な選択がある。ゼロ形式では、プロセスは図1にある伸展する円筒の先端面である直接現実¹⁾に位置づけられる。この場所はグラウンドであるため、その指定されたプロセスは発話時と一致することになる。これに対して、-edとその変化形はプロファイルされたプロセスを非直接現実、すなわち、先端面を除いた見做し現実のどこかに据える。すると、結果的に、この位置は発話時の前になる。このようにして、現実が考慮される場合にのみ、認識的**直接**と**非直接**は、それぞれ、時間のなかの**現在**と**過去**の位置を共有することとなる。つまり、「**現在**」対「**過去**」の時間特定は、グラウンド要素の典型的な価値として顕れるのである。

2.2 現実・実在・心的距離

2.1で紹介した「英語の時制・モダリティ」理論をまとめたものが表-2である。

| | 現 在 | 過 去 | 未 来 |
|----------|-------|-----------|--------|
| 現実 | 見做し現実 | | 非知現実 |
| プロセス | 現実のもの | | 非現実のもの |
| グラウンディング | 直接 | 非直接 | |
| 形式 | ゼロ | -edとその変化形 | モーダル |

表-2

事態解釈の観点から捉えると「時制」とは、「現実」「グラウンディング」要因によって誘発される「時間」観念が付加されて表出^(注6)する概念である。従来の時制研究からすれば、時制を説明するための要因として、「現実」「グラウンディング」という要因が作用するとするのは特筆すべき点であろう。まず、「現実」についていえば、主体は自己が現実と想定する〈見做し現実〉と現実とは見なすことができない〈非知現実〉に二分して認識している。〈見做し現実〉に存在するプロセスは、主体にとって〈現実のもの〉であり、〈非知現実〉に存在するプロセスは〈非現実のもの〉である。そして、これら〈見做し現実〉と〈非知現実〉に「時間」観念が付加されると、前者に〈過去・現在〉、後者に〈未来〉の時制概念が主体に認識されるのである。時制といえば、従来、当然のここのようにして均等に区分けされている〈現在〉〈過去〉〈未来〉の三分であるが、「現実」概念との関連から捉えると時制の意味は〈現在・過去〉と〈未来〉とに大きく二分されるのである。

さらに、〈見做し現実〉は「グラウンディング」認識によって二分される。グラウンディングとは、主体がプロセスの存在する位置を自己の存在するグラウンドに関連づけて認識することである。グラウンディングされたプロセスはグラウンドと〈直接〉の位置にあるとして認識されるか、グラウンドからは〈非直接〉の位置にあるとして認識され、このことは、グラウンドを基点とした心的遠近距離の相違として認識される。そして、この心的距離の差異に「時間」観念が付加されると、心的に近いと認識される〈直接〉領域に〈現在〉、遠いと認識される〈非直接〉領域に〈過去〉という時制が認識されるのである。

さて、上述の理論を援用して日本語の時制形式の意味を考えてみよう。先に、表-1から日本語の時制とその形式の関係が、〈現在〉は「状態／ル」「非状態／テイル」、〈過去〉は「状態／タ」「非状態／タ、テイタ」、〈未来〉は「非状態／ル」であることを見た。そこで、これら五種類の動詞と言語形式の組み合わせの意味を、視点を転換して、事態解釈の観点から時制を考えるにあたって必須要因である〈現実〉〈プロセス〉〈グラウンディング〉の三要素との連関から考える。なお、考察に先立って、表-1での動詞の種類分けにある「状態」「非状態」という用語を、これらは事態解釈の要因である〈プロセス〉と同一概念であると考えられるため、それぞれ「非プロセス」「プロセス」という用語に直し、「非プロセス／ル」「プロセス／ル」「プロセス／テイル」「非プロセス／タ」「プロセス／タ、テイタ」の五種類の組み合わせとして考えていく。

まず、「現在」の事態を表す「非プロセス／ル」と「プロセス／テイル」について考える。事態を「現在」の事態として解釈するということは、〈見做し現実〉のなかの〈直接現実〉に位置する主体が、プロファイルした事態も自己が存在する〈直接現実〉に存在する、つまり、自己と〈同位置〉に〈実在する〉と解釈することである。この実在解釈に際して、その事態がプロセスを備えていると解釈すればテイルで、プロセスを備えていないと解釈

すれば、それぞれの解釈態度が言語化される。そして、されにその解釈態度に「時間」観念が付加されると〈現在〉概念が創出されるのである。

他方、「過去」の事態であることを表す「非プロセス／タ」「プロセス／タ、テイタ」は、事態が〈非直接現実〉に〈実在〉するとして解釈する、主体の解釈態度を反映する。〈非直接現実〉とは〈見做し現実〉のなかの自己から離れた場であることから、〈実在〉するとして解釈される事態は主体から〈遠隔〉に位置づけられており、回想を介して接触し、認識する現実の経験事態である。主体は回想を介して、〈遠隔〉に事態が〈実在〉することを解釈するのだが、その実在解釈に際して、その事態がプロセスを備えていると解釈すればタ、テイタで、プロセスを備えていないと解釈すればタで、それぞれの解釈態度が言語化される。そして、その解釈態度に「時間」観念が付加されると〈過去〉概念が創出されるのである。

したがって、「現在」と「過去」とは、事態の〈実在〉を解釈するという点において共通であり、主体と事態の心的距離の差において〈同位置〉対〈遠隔〉の異なりを示しているといえる。このことから、日本語の「現在」と「過去」の事態解釈は、概ね、英語の「現在」と「過去」と同様の解釈態度であるといえそうである。これに対し、大きな異なりを見せるのが「未来」の事態解釈である。

「未来」の事態を表す「プロセス／ル」はいわゆる終止形と呼ばれる形式である。終止形は、英語では〈直接現実〉に事態が存在すると解釈する態度を反映する形式であるが、日本語では事態が〈非現実〉に存在すると解釈する態度を反映する。では、事態が〈非現実〉に存在すると解釈するというのはどういうことなのだろうか。「現在」と「過去」とでは、事態の存在する位置が〈直接現実〉と〈非直接現実〉という違いはあるものの、対象事態は共に〈見做し現実〉に存在する事態であり、主体が認識するのはその〈実在〉である。ところが一方、「プロセス／ル」の場合は、事態の存在する場が〈非現実〉であることから、主体はその事態の〈実在〉は認識し得ない。つまり、事態を〈非現実〉の事態として解釈するということは、事態の〈非実在〉を解釈することなのである。未来の事態を〈実在〉していると解釈し得ないのは英語も同じであることから、英語の場合は必ずそこにモーダルが要求されるのだろう。しかし、日本語では、もちろん、モーダルを付加することも可能であるが、たんに「プロセス／ル」形式で未来を表すことが可能であり、その運用は発話行為、語用論の観点から説明されるものである。こういった〈非実在〉の解釈態度に、とりたてて「時間」観念が付与されると〈未来〉概念が表出するのである。

以上、時制観念を誘発する〈現実〉観念との関係から日本語の時制形式の意味を考えた。その結果、英語と比して大きな異なりを見せる「プロセス／ル」の振る舞いが手がかりとなり、日本語の時制形式の興味深い意味特徴が見えてきた。それは、「現実」概念によって

引き起こされる〈実在〉解釈の有無が時制を〈過去・現在〉と〈未来〉に二分するということである。これは英語とは異なる特筆すべき日本語の特徴である。この際立った日本語の特徴が意味することについては次節で詳説する。また、どちらも〈実在〉を解釈する態度を反映する「非プロセス／ル」「プロセス／テイル」と「非プロセス／タ」「プロセス／タ」では、事態が〈実在していると解釈される位置が、主体と〈同位置〉であるか、主体から〈遠隔〉であるかの差異を反映するものである。これまで見てきた日本語の時制形式の意味をまとめたものが表-3である。

| 要因・事態 | | タ | | ル | |
|-------|-------|---------|-----|--------|--------|
| | | タ | テイタ | ル | テイル |
| 時制 | 非プロセス | 過 去 | | 現 在 | |
| | プロセス | 過 去 | | 未 来 | 現 在 |
| 現実 | 非プロセス | 見做し／非直接 | | 見做し／直接 | |
| | プロセス | 見做し／非直接 | | 非現実 | 見做し／直接 |
| 実在 | 非プロセス | 遠隔実在 | | 同位置実在 | |
| | プロセス | 遠 隔 実 在 | | 非実在 | 同位置実在 |

表-3

3 主観・客観解釈

「現実」概念との関連から考えると、日本語の時制形式の意味することは、〈過去・現在〉と〈未来〉とで質的に大きく異なることを前節で説明した。この章では、この異質さが主体の事態解釈における主観・客観の別を表すことを説明する。

3.1 三つのタイプ

言語主体の事態認知態度をモデル化した典型例の一つに、外部世界に対するわれわれの知覚経験を反映する認知モデルであるステージ・モデル (stage model) がある (Langacker 1990)。ステージモデルとは、われわれがどのようにして外界世界を解釈するかを説明するモデルであり、この用語はわれわれの外界認知プロセスが演劇を見る場合と類似していることに由来している。舞台上で繰り広げられる芝居を客席から眺めるように、われわれは外部の領域を認識するものとみなし、舞台上をオンステージ、観客席をオフステージと呼ぶ。一般に、われわれが外部世界を知覚していく場合には、その対象世界の一部を構成するステージに焦点を当て、このステージにおいて展開する事態を眺めていく。この場合、

日本語時制形式の意味

典型的には（知覚者としての）認知主体は，このステージの外に位置づけられる地点から，ステージ上において展開する事態を眺めていく。ステージ・モデルは図2に示される。図2のボックスは，事態の生起するステージを示す。ステージの中のサークルは事態，またボックスの下で囲まれているVはこの事態を知覚している観察者（viewer），上向きの矢印は認知主体から行為の事態に向けられる視線を示す。

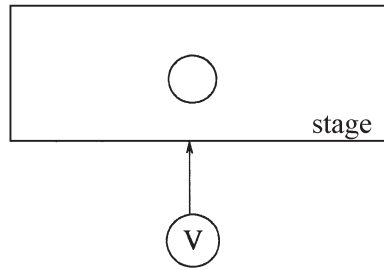


図-2

ステージ・モデルは事態認知のさまざまな面を説明する汎用性の高いモデルであるとされており，ここではこのモデルを用いて事態認識の主観・客観性について説明する。主観、客観の問題は，概念主体と概念化される客体との関係にある。概念主体と概念化される客体の関係が最も非対称を成すのは，オンステージの客体事態を認識する際に，概念主体が全く自己を喪失した形でその認識のなかに埋め込まれる場合と，概念主体には関係なく，概念客体が明白で，それ自体しっかり輪郭づけられており，正確に理解される場合である^(注7)。両者の関係は程度の問題であり，主体，客体の役割は，しっかりと区別されているようにも，または多少曖昧であろうとも，どんな概念化にも表れている。この基本的な関係を表したものが図-3である。

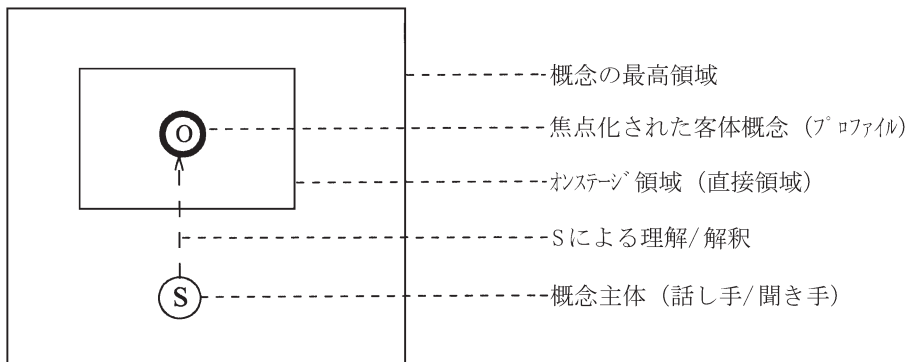


図-3

Langacker (2002)

グラウンドとの関連からみた言語表現の主観性の段階を Langacker (1990) ではステージ・モデルを用いて三つのタイプに区分している。図-4 の細い実線のサークルで囲まれた G はグラウンド、太線のサークルは主体によって認識の対象としてプロファイルされた事態、破線の楕円サークルで囲まれた IS はこの事態が焦点化され、認識される認知の直接スコープ (IS=immediate scope), ボックスに囲まれた MS は認知の最大スコープ (MS=maximal scope) を示す。プロファイルされる存在を位置づける IS の領域は、破線の楕円サークルで囲まれたオンステージ領域に対応する。また、MS の領域は、ボックスで囲まれた部分であり、オフステージに対応する。

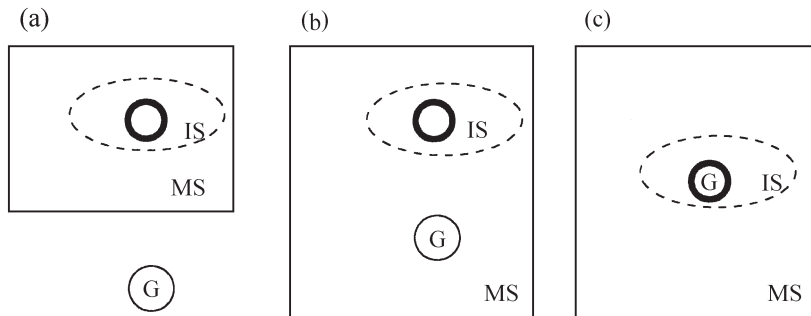


図-4

Langacker (1990: 10)

(a) と (b) (c) では構図上、明らかな異なりがある。(a) は主体と客体の存在が完全に分離している関係を示しており、主体 (G) は問題の客体としての存在が位置づけられるスコープの外側の観察者に相当する。これにたいし、(b) (c) では主体は、言語表現それ自体には明示されていないが、参照点として主体を位置づけないかぎり、その指示対象を同定することは不可能な構図となっている。

したがって、客体の存在するスコープの外側の観察者として主体が位置する (a) と、主体が参照点として位置づけられている (b) (c) の構図上の異なりは、(a) が客観性の強さを、(b) (c) が主観性の強さを表すととなる。ともに主観性の強さを示す (b) (c) には次のような異なりがある。(b) では、主体は自己の視座を舞台の外側 (オフステージ) に位置づけ、そこからパースペクティブを投げ、舞台上の事態の存在を実在としてプロファイルする。この時の主体の意識からすれば、オフステージにある自己を参照点としてオンステージに存在する事態の実在を認識することから、事態は主体にとって〈遠隔〉な位置での存在であるという認識になる。一方、(c) では、主体は自己の視座をオンステージに据え、そこからパースペクティブを投じてステージ上にある事態の存在を認識する。この時の主体の意識からすれば、オンステージの事態は、オンステージにある自己を参照点として、

自己と〈同位置〉にあることになる。つまり、(b) (c) では同一の認知プロセスが作用しているものの、(b) ではオフステージ、(c) ではオンステージというように主体の視座が異なるのである。この視座の異なりが主体と事態との心的距離の差異を惹起し、(b) では〈遠隔〉、(c) では〈同位置〉に事態が存在するとして解釈されるのである。

3.2 主客観・心的距離

図-4が示す、客観性の高い(a)と主観性の高い(b) (c)の異なりは、〈实在〉解釈に関わる日本語の時制形式の意味のちがいを説明する。自己を参照点とした同位置に事態の实在を認識する形式である「非プロセス／ル」「プロセス／テイル」は、視座をオンステージに据えた自己を参照点として自己と〈同位置〉にあるとして対象の存在を認識する(c)の構図に該当することから、これらの形式は主観性の高い事態認識態度を反映するものといえる。また、同様に主観性の高い認識態度を反映する(b)には、自己を参照点とした〈遠隔〉に事態の实在を認識する形式である「非プロセス／タ」「プロセス／タ、テイタ」が該当する。そして、自己とは全く乖離したところに事態は存在するとして、その〈实在〉については何ら関与しないという、客観的傍観者の立場をとる「プロセス／ル」は(a)の構図に該当するのである。以上をまとめると表-4となる。

| 形式 事態・プロセス | | タ | | ル | |
|---------------|-------|-----|-----|-----|-----|
| | | タ | テイタ | ル | テイル |
| 实在 | 非プロセス | 実 在 | | 実 在 | |
| | プロセス | 実 在 | | 非实在 | 実 在 |
| 心的距離 | 非プロセス | 遠 隔 | | 同位置 | |
| | プロセス | 遠 隔 | | 乖 離 | 同位置 |
| 主客観性 | 非プロセス | 主 観 | | 主 観 | |
| | プロセス | 主 観 | | 客 観 | 主 観 |
| 認知図式 | 非プロセス | (b) | | (c) | |
| | プロセス | (b) | | (a) | (c) |

表-4

4 日本語の動詞の時制形式の認知的意味

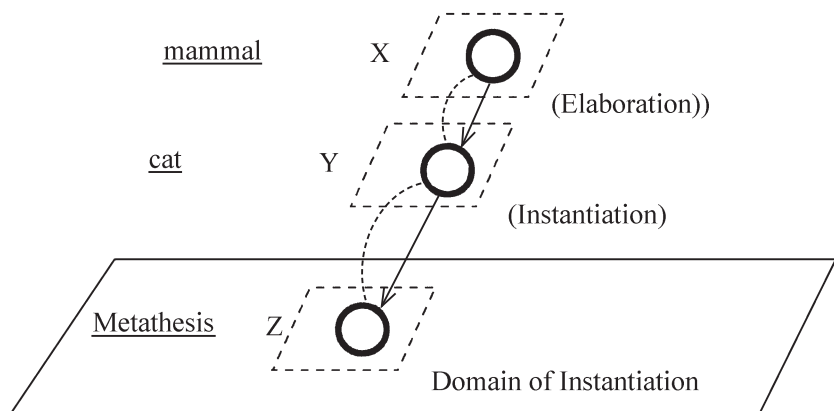
従来、時制形式という名称を付され、時制を示すことこそがその本質的意味であると考えられてきたタ形式、ル形式である。しかし、これまでの主流派の見解に抗してパラダイ

ムを転換してみれば、タ形式、ル形式は、〈現実〉〈実在〉〈心的距離〉〈主客観性〉〈時制〉についての主体の解釈態度を反映する言語形式であることが明らかとなった。日本語の時制形式の意味を概念主体の事態把握の観点から捉え直してまとめたものが表-5である。

| 要因・事態 | | タ | | ル | |
|-------|-------|---------|-----|--------|--------|
| | | タ | テイタ | ル | テイル |
| 現実 | 非プロセス | 見做し／非直接 | | 見做し／直接 | |
| | プロセス | 見做し／非直接 | | 非現実 | 見做し／直接 |
| 実在 | 非プロセス | 実 在 | | 実 在 | |
| | プロセス | 実 在 | | 非実在 | 実 在 |
| 心的距離 | 非プロセス | 遠 隔 | | 同位置 | |
| | プロセス | 遠 隔 | | 乖 離 | 同位置 |
| 主客観性 | 非プロセス | 主 観 | | 主 観 | |
| | プロセス | 主 観 | | 客 観 | 主 観 |
| 時制 | 非プロセス | 過 去 | | 現 在 | |
| | プロセス | 過 去 | | 未 来 | 現 在 |

表-5

日本語の動詞の時制形式の意味は、表-5が主張するコアなる意味を type として様々な instance を持つ構造 (図5) から成っている。



(図5)

Langacker (1991: 62)

図5では、XからZ (mammal → cat → Metathesis (猫の固有名))へと概念構造が階層を成していることを矢印が示し、カーブした破線は上位概念と下位概念が同一のスキーマから成ることを示す。Xに該当するのが表-5の内容をすべて備えた時制形式のスキーマ的意味であり、そのスキーマの焦点化のされ方の相違がYに、「現実」「実在」「心的遠近」距離」の差異を表出させる。実際の言語使用の場面であるZでは、Yで焦点化されたそれぞれが用法として捉えられるのである。

[注]

1. 尾上 (1991), 国立国語研究所 (1985) 等参照
2. 小説の文末辞としてのタ形, ル形のはたらきも時制概念では説明できない典型例である。山本 (1996, 2004 参照)
3. Fauconnier (1994: xix) では次の指摘がある。「実際、特異なケースが操作の一般的性質を可能にするのに対して、典型的なケースはそうでないことや、いわゆる、「典型的な」ケースが一般的メカニズムの単純な個別例として簡単に説明できることは、これまで何度も確認されている。」
4. 言語を自律した記号とみなす従来の言語研究と言語を言語主体の認識の反映とする認知言語学とでは、多義性の意義は大きく異なる。後者の意義についてはBrigitte Nerlich [et al.] (2003) を参照。
5. 本論文では形容詞については言及しない。
6. Fauconnier (2002) でのメンタルスペースの観点からの「時間の創出」についての説明はわれわれの日常観念を説明したものであり、実に興味深い。
7. 池上 (2003) 参照。

[参考文献]

- 池上嘉彦, 2003, 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」山梨正明他編『認知言語学論考』No.3, pp.1-49, ひつじ書房
- 尾上圭介, 2001, 『文法と意味 I』くろしお出版
- 金水敏他, 2000, 『時・否定と取り立て』岩波書店
- 国立国語研究所, 1985, 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 町田健, 1989, 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 村井新次郎, 1991, 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 山梨正明, 2000, 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明, 2009, 『認知構文論』大修館書店
- 山本雅子, 1996, 「テンスとモダリティのあいだ」『言語科学論集』京都大学大学人間情報講座, 『日本語学論説資料第45号』所収, 論説資料保存会
- 山本雅子, 1997, 「あっ! こんなところにあった」『言語科学論集』京都大学大学人間情報講座, 『日本

語学論説資料第 45 号』所収。論説資料保存会

山本雅子. 2004. 「語りのパースペクティヴ」『言語と文化』5 号。愛知大学外国語研究室

山本雅子. 2008 「テイルの意味」『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房

Binnick Robert I. 1991. *Time and the Verb*. Oxford University Press

Brigitte Nerlich [et al.]. 2003. *Polysemy*, Mouton de Gruyter

Brisard, Frank. (eds.) 2002. *Grounding*, Mouton de Gruyter

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press

Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge University Press

Denett, Daniel C.. 1991. *Consciousness Explained*. Back Bay Books

Fauconnier, Gille. 1994. *Mental Space*. Basic Books.

Fauconnier, Gille and Turner, Mark. 2002. *The way we think*. Basic Books.

Jaszczolt, K.M.. 2009. *Presenting Time*. Oxford University Press

Langacker, Ronald W. 1990. "Subjectification," *Cognitive Linguistics* Vol. 1, pp.5-38

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume 2, Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter

Langacker, Ronald W. 2002. *Concept, Image, and Symbol*. Mouton de Gruyter

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press

Michaelis, Laura A. 1998. *Aspectual Grammar and Past-Time Reference*. Routledge

Nuyts, Jan. 2001. *Epistemic Modality, Language, and Conceptualization*. John Benjamins